

これからも、世間的なありかたから、 少しだけ離れていてほしい

佐久総合病院地域医療部地域ケア科医長 色平哲郎

『のんびる』創刊100号、まことにおめでとうございます！

御誌にコラムの連載(※)を始めてからもう3年目、32回を重ねました。ご愛読に感謝いたします。

私も手元に届く毎号をなめるように読んで、いつも感心しています。なんとというか、こんな雑誌がかくも命を長らえているとは、日本も捨てたもんじゃないなあ、つい嬉しくなるのです。自分には欠けている人情味(?)や生活実感あふれる雑誌が『のんびる』です。「金持ちより心持ち」。すべてをお金に換算しないでくれ、という私の願いをいまだ保持しつづけてくれている稀有な雑誌です。

「すきな人とすきなところで暮らしつづけたい」。人々のそんな素朴な願いを体现したいと願っている、そんな雑誌だとも思います。

今後に期待することは、自分で言うのもおこがましいですが、世間的なありかたから、今後も、少しだけ離れていてほしい。すべてがおかね(財貨)とおかみ(権力)に収れんされるような(俗な)ありかたから、今後も、少しだけ離れていてほしいと思います。

『のんびる』に対して執筆者としてばかりではなく、読者としても向き合うようになって、医、食、住、あそび、農、牧、林、水産業、ケアと街づくり、子どもたち……と、さまざまな出会いがありました。

とくに「障がい者アート」の特集には瞠目しました。ただただ、圧倒されました。まさに本誌は感動と共感の場となっています。

『のんびる』が教えてくれるのは、「もうひとつの社会」。それはオルタナティブなあり方・生き方をめざす人々の姿です。

私ごとですが、かつて山村の診療所長を務めた12年間は、「出会いと別れ」が光の当て方次第でさまざまな像を結ぶことを知る日々でした。その後山を下り、街なかの佐久総合病院の「地域ケア科」に籍を置くいまま、山での経験が私の医療観の礎になっています。

同じように、『のんびる』との出会いが、それまでの生き方をふり返り、もうひとつの生き方に目を開かされていったという読者も多いのではないのでしょうか。

地域医療の難しさとそのゆえの醍醐味は、人々と一緒に暮らしながら、生活の一部を担うということなのです。

『のんびる』もまた、そうしたミッションを今後も果たしてくれることを望んでやみません。それにしても、『のんびる』とは心温まる、いいネーミングですねえ。



※連載「地域と医療からみる未来のかたち」は本記事掲載のためお休みします。